

2023年7月23日（日）主日朝礼拝説教

『ただ一つ知っている事』 井上隆晶牧師  
ヨシュア記5章6～8節、ヨハネ福音書9章24～34節

### ①【新しく創造されなければ神を知ることはできない】

イエス様は通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられました。弟子たちは「この人が生まれつき目が見えないのは、誰のせいですか」と聞くと、イエス様は「誰のせいでもない。神の業が現れるためだ」と言われました。その人の障害や病いを通して神が本当におられるという事をこの世が知るためだという意味です。この生まれつき目が見えない人はすべての人類を象徴しているように思えます。人はこの世の物は見えますが、神の物を見る事が出来ないからです。イエス様は地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目に塗り「シロアムの池に行き洗いなさい」と言われました。彼は言われた通りに行き洗うと目が見えるようになって帰ってきました。この物語には土をこねる事と、洗う事の二つの動作が出てきます。土をこねるのは神による創造の業を意味し、洗いは人間による洗礼の業を意味しています。洗礼は神の恵みと人間の自由意志による協働作業なのです。いくら目に泥を塗られても、彼がシロアムの池（教会の事）に行き洗わなければ見えるようにならないからです。人は肉のまま（古いまま）では神を知ることは出来ず、神によって新しく創られなければ神を知ることはできません。パウロも「世は自分の知恵で神を知ることはできませんでした。」（Iコリント1：21）と書いています。

しかし、多くの人はそのことを信じようとしません。人間の力で神を知ることができる、聖書を研究すれば神は分かると思っ込んでいます。今の日本では「聖書」は誰でも手に入れることが出来ますし、読んだり、学んだりすることもできます。キリスト教主義の学校でも、聖書を学びますが、ほとんど信者にはなりません。神学校では神学という学問は教えますが、祈りを教えません。その結果、学問によって聖書はバラバラにされ、神がよけいに分からなくなってしまっています。だからイエス様もユダヤ人たちにこう言われました。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書は私について証しをするものだ。それなのに、あなたたちは、命を得るために私の所へ来ようとしていない。」（ヨハネ5：39～40）イエス様の所へ行くとは、教会へ行って祈る、イエス様に求めるという意味です。学びではなく祈りが重要なのです。聖書を勉強することより、イエス様に祈る事に時間をかけなければなりません。

### ②【キリストを体験したか？神の業を体験したか？】

この後、ファリサイ派の人たちと盲人であった人との間になされた、とても長い議論が載っています。こちらの方が重要だという事です。ファリサイ派の人たち

が「お前は どうして 見える ように なった のか」と尋ねると、彼は「あの方が、私の目にこねた土を目に塗りました。そして、私が洗うと見えるようになったのです」（15 節）と証します。それでも彼らは納得できず、両親を呼んで聞きますが分かりません。彼らは「私たちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」（24 節）「我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのか知らない。」（29 節）「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか。」（34 節）と、自分たちは何でも知っていると言い、彼のいうことを聞こうとしません。しかし目が見えるようになった人は「ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるという事です。」（25 節）といました。生まれつき目の見えなかった人は、聖書の知識はありませんでしたが「キリストを体験」し、神の業を体験したのです。キリスト教信仰とは、結局、これだと思います。この一つのことを知らないで、他のことを知っても何の力にもなりません。ただ一つだけでもよいかから、「私はイエス様に出会ってこうされた」というものを持っていなければなりません。教会の弱さ、伝道の不振は、この一つのことを知らないからなのだと思います。「永遠の命とは、…イエス・キリストを知ることです。」（ヨハネ 17：3）という言葉思い出します。

### ③【血が献げられることによって教会は堅固になった】

私は先週、北大阪教会の生い立ちの話をしました。貧しい中から教会は生まれました。その壁土には本当に信者さんたちの血と汗と涙が込められていました。それを聞いたとき、「ああこの教会は潰れない」と直感的に思いました。私の母教会である大阪西野田教会もそうでした。戦時中「天皇に頭を下げなかった」ということで牧師は逮捕され、拷問されて牢屋の中で殉教し、教会は解散させられました。戦後、散った信者たちを集めるためにやってきた中島誠牧師は、長屋で大勢の人が寝ている所から一人で伝道を始めました。一日の食べ物「焼き鳥一本」だけだったと聞いています。苦労がたたって肝硬変になりあつという間に天に召されました。その後を妻の中島恵美子牧師が引き継ぎ、そこから 5 人の伝道者が生まれました。血が献げられる、犠牲が献げられることによって教会は固く立ち、信仰は堅固になるのです。迫害時代、ローマでは教会は地下墳墓で礼拝し、殉教者の棺の上で聖餐式をしたと聞いています。そこから祭壇のカバーに殉教者のミイラ（不朽体）が縫い込まれるようになりました。それは血と犠牲の上に教会は立つことを証しているのです。

●逢坂元吉郎牧師はこんなことを書いています。

「殉教者伝を読むと、斬った者に斬られた者の姿が目には焼きついて忘れられぬという記事がよくある。最も弱い女性が殺され。殺された者が殺した者たちを信者にし、さらに殉教させている。…殉教することが分かっているが洗礼を受ける。そしていつまでも殉教者が絶えないのである。血が底に入ってくることによってキリスト教は動かされないものとなった。これがキリスト教の今日までの歴史で

ある。苦しむことによって子と孫ができる。教会は受難を通して子を産んできたのである。…しかし、殉教とは血を流すことばかりではない。キリストの十字架に従うことである。それゆえに十字架を負って従うならば、台所の仕事をしていても聖者殉教者と同様な道である。『一粒の麦地に落ちて死なずば』の聖言のごとく、われわれも地に落ちる見通しをつけねばならぬ。…死んでこそ別のものが生まれて来るのである。」

そして、私たちの体の中にも、毎週聖餐によってキリストの裂かれた体と血が入って来ます。縦糸と横糸が組み合わされて一枚の布に織られるように、キリストの血と私の血が混ざりあい、キリストの肉と私の肉が一つに織りあい、私は主の犠牲の血によって堅固にされてゆくのです。それに気がついたとき、ものすごい感動を覚えました。礼拝の最初は気力が湧かず、意欲は削がれ、抜け殻のようであったのに、聖餐の後、私は変わってしまったのです。自らを献げようと思えるようになったのです。聖餐礼拝の力というのはものすごいものです。

●病院のチャプレンをされている沼野尚美さんの本の中に 21 歳で天に召された青年の話が載っています。K さんは悪性脳腫瘍で入院をしていました。次々と退院してゆく人たちに口では「よかったですね。おめでとうございます。」と言いながら、心では「〇〇さん、もっと悪い病気になって帰っておいでよ」と人の不幸を願う自分が嫌で、自分の心をコントロールできない苦しみを味わっていました。手足の麻痺が進み、イライラするようになり、医療者を罵り、「神などいない」と言っていたのですが、ある時、自分が危篤状態に陥ったのに死ななかつたことを聞かされ、「その時、死んでいても不思議がなかつたとすれば、今、生きているのは自分の力ではなく、生かされているのだ！」と思ったというのです。そして、自分を生かして下さっている方を知りたいと思い、聖書の話を知りようになり、やがて神を信じて洗礼を受けたのです。彼はこんなことを言っています。「人間の本当の幸せって、心が自由であることだよ。憎しみ、妬み、怒りから自由に解放されていることだと思う。」「洗礼を受けて信者になったからといって、僕は完全になつたわけではないよ。羨ましい気持ちは今でもある。でも、そんな僕と、イエス様、一緒に生きて下さい。と祈って生活できる今は、やっぱりぜんぜん違ふんだよ。」「嬉しくて、胸がピンピン張り裂けそうや。みんなにもこの喜びを知ってほしいんだよ。」

この 21 歳で召された青年もキリストを知った一人でした。キリストを体験した人は、必ず心が喜びに支配されてしまいます。キリストの命が、私たちを内側から変えてしまうからです。それにまさる喜びはありません。教会がこの世に勝利するのは、この喜びがあるからなのです。盲人だった人に倣い、私たちも同じように言いましょう。「ただ一つ知っているのは、喜びがなかつた私が、今はキリストの事を思うと、喜びに溢れるという事です。」